

医療関係者による共同記者会見の要旨について

日時	R3. 4. 22 (木)
	19 : 00～19 : 40
場所	愛媛県医師会館

※左から順に、

愛媛県医師会 村上博 会長
愛媛大学医学部附属病院 杉山隆 院長
愛媛大学医学部救急医学 佐藤格夫 教授
愛媛県立中央病院 菅政治 院長
松山赤十字病院 横田英介 院長
愛媛大学医学部附属病院感染制御部 田内久道 部長

(司会)

それではただいまから共同記者会見を始めたいと思います。本日の内容と出席者はお手元にお配りしたペーパーのとおりですので、よろしく願いいたします。時間も限られておりますので、早速、村上医師会長から、よろしく願いいたします。

(愛媛県医師会・村上会長)

皆さんこんばんは。愛媛県医師会の村上博です。

本日の会見の目的でございますが、医療逼迫（ひっぱく）という言葉が時代のキーワードのように語られます。しかし、愛媛県下におきましては、もう病床も、いっぱいいっぱいですし、一般の医療を縮小、予定手術を延期というようなところも出始めます。それから、なかなか入院先が決まらなくて、自宅療養中に死亡なされたといった事案も発生しています。よって、これは逼迫ではなくて、医療崩壊が始まっているのではないかというふうに危惧をしているところであります。そこで、今日、診療の現場の先生方にお集まりをいただきまして、現状をお話しいただきたいというふうに思って、共同記者会見を開催することにしました。

なお、壇上の先生方は、この後、またそれぞれの業務にお戻りになる予定でございます。申し訳ございませんが、会見の時間は予定通り 19 時半をひとまずの目途とさせていただきますので、ご協力とご理解をお願いいたします。壇上の先生方も、簡潔なスピーチでよろしく願いします。

私の隣が愛媛大学医学部附属病院院長の杉山教授ですので、杉山先生、司会の方、お

願います。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

ただ今ご紹介いただきました愛媛大学医学部附属病院長の杉山でございます。

本日は、今、村上会長がおっしゃいましたように、医療のとても厳しい状況であるということを、それぞれの先生方の立場からお話しいただきたいと思います。

それでは、まず最初に、愛媛大学の医学部附属病院の感染制御部の部長の田内久道先生に3月末からの第4波の概要と現状ということでお話をさせていただきます。田内先生、よろしく願います。

(愛媛大学医学部附属病院感染制御部・田内部長)

田内でございます。よろしく願います。私の方からご説明をしたいと思います。

私は、現在、全ての愛媛県のデータを把握しているわけではありませんが、しかし、宿泊療養施設の運営と、それから今も全力で治療に当たってくれている、松山赤十字病院、県立中央病院、愛媛大学、そして東予と南予の病院の先生方と、日頃やり取りをしております。その中で感じていることをお伝えしたいと思います。

今回の流行は、3月下旬に松山市の繁華街クラスターとして、いきなり200人ですね、200人の患者発生から始まりました。それが4月上旬には、そこから家庭内、それから職場に感染が広がり、現在は、身体的もしくは社会的に弱い人たちが集団で生活をする病院や高齢者施設にまで、ウイルスが入り込んでいる状況です。また、地域も松山から東予、南予へ広く広がりました。今回の流行は感染者がいきなり200人からのスタートですので、ゆっくり患者が増加する状況とは異なり、このまま患者さんの発生がおさまらないと医療提供体制が追い付かなくなる可能性があります。

今回の流行は今までとは全く異なります。私が担当しています宿泊療養施設について申し上げますと、現在まで294名の患者さんが療養されています。その中には、療養中に状態が悪くなり、医療機関に搬送を行った例があります。その数は第1波では0人、ありませんでした。第2波は宿泊療養施設を開設しておりませんので、これも0人。昨年末から2月にかけての第3波は、救急搬送を行った例が178人中10名で5.6%。今回の3月下旬からの第4波では98人中17人で、17.3%の患者さんを赤十字病院、それから県立中央病院の方に救急搬送させていただきました。明らかに療養中に状態が悪くなる患者さんが増えています。

ただ増えているとはいってもですね、愛媛県で新型コロナウイルス感染症にかかった人は2千人程度で、多くの人はこの病気を身近に感じていないと思います。私たちは毎日患者さんに接していますが、本当に苦しそうで、見ていて辛い病気です。身近に見ていて、自分はこの病気にかかりたくない、強く感じる、本気で思うような、そういう辛い病気です。

今流行しているのは、大阪と同じ変異株です。大阪の医療が壊滅的な打撃を受けていることは、報道などで皆さんご承知だと思います。今日も見ましたけれども、救急車に乗って搬送先が決まるまで 7 時間かかるというようなことが報道されていました。このペースだと、愛媛県ですが、このペースだと今後感染する人が重症化する 1 週間後には、今の大阪と同じように十分な医療が受けられなくなる可能性があります。第 4 波では若い人の重症者も増えています。ウイルスは広く市中にまん延をしています。どこで感染するかわからないほど、まん延をしている状況です。どうか皆さん、自分の命を守る行動をしてください。私からは以上です。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

田内先生、ありがとうございます。田内先生には概要と状況をお話いただきました。次に、松山赤十字病院の状況、松山赤十字病院院長の横田英介先生、お願いいたします。

(松山赤十字病院・横田院長)

松山赤十字病院の横田です。当院の状況ということでお話をさせていただきます。

コロナの診療に関しましては、今日ここに 3 病院ある中で、いわゆる役割分担ということで、重症患者については、愛媛大学及び県立中央病院で対応していただくということで、当院では、重症者を除く中等症の患者を受け入れるということ、そして一方では、救急を含めた一般医療を維持するというので、この 1 年間対応してまいりました。

いわゆるこの第 4 波という今の状況、田内先生からお話しされてましたとおりなんですけれども、そういった中で、やはり一番問題となってくるのは、重症患者対応ではないかというふうに思います。今申し上げましたように、愛媛大学と県中で受け入れてもらうわけですけれども、そこもかなりぎりぎりのところになった中で、当院も、状況に応じては、場合によっては、重症を受けないといけないということで、今、準備を進めておる、してきたところではありますけれども、実際、受け入れるとなると、看護スタッフ等の問題もあって、そうなりますと、やはり ICU 等の稼働病床を減らさなければいけないというような、そういう事態も発生しますし、何よりも当院の、今特殊な状況というのが、ご存知のように 3 月に新病院がオープンしたわけですけど、その時に病床数が 50 床近く削減したことにより、そういった中で 1 病棟をコロナの専用病棟として使っておりますので、現状ではコロナの病床がほぼ満床的に動いているわけですけど、一般病床というのも、一方で、ほぼいっぱいいっぱいの状況。土日は多少減りますけれども、平日はほぼ 100% 埋まっているというような、そういう状況で動いていることになります。ですから、まあ、そういう状況で今の感染状況が続けば、コロナ自体の診療にも支障があるのは当然ですけども、一方で、救急を含めて、いわゆる待つことのできない急性疾患に対する対応ができないということで、これは非常に大きな影響が出てくるのではないかというふうに危惧しておるところです。私からは以上です。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

横田先生、ありがとうございました。役割（機能）分担という大切なキーワードと、それから日赤病院での状況をご説明いただきました。一般の救急医療も受けなければならぬわけですから、極めて困難な状況が来ているということでございます。

それでは次に、愛媛県立中央病院の状況という内容で、愛媛県立中央病院長の菅先生、よろしく願いいたします。

(愛媛県立中央病院・菅院長)

愛媛県立中央病院長の菅です。当院の状況をご説明します。

当院は、昨年11月のコロナ患者の急増時に1病棟を閉鎖して感染症病棟に人的資源を投入して、それによって通常の一般診療ですとか、あるいは、救急、周産期といった当院独自の機能を保持してきました。また、患者数が落ち着いている時期には、より重症の患者さんは、愛媛大学さんの方をお願いして、うちは中等症以下の患者さんをたくさん受け入れるという形で、横田先生が言われる機能分担を図って参りました。

しかし、3月下旬以降の変異株における患者数の急増を受けて、積極的な治療が必要な患者さんが急増している、あわせて重症患者さんも大変増えてきているというような状況になってきております。そのため、当院では2つある集中治療室、ICUの1つをコロナ患者さん専用、コロナ患者さんの重症患者さんを治療する集中治療室にいたしました。また、感染症病床でも受け入れ患者さんを増やす必要に迫られて、より人的資源の投入ということが求められました。そのため、4月中旬以降、当院ではやむを得ず診療機能の3割を落とすということを院内に通知いたしまして、それにより人的資源を捻出してそれらの病棟に配置しております。そのため、手術であるとか、検査の入院の予定の患者さんにも、急に治療の先延ばし、延期をお願いするような事態になりまして、このようなお願いを申し上げた患者さんには大変申し訳なく思っております。また、当院のICUの縮小により、救急の患者さんも、近くの松山赤十字病院であるとか、あるいは他の病院に、現場レベルで緊急をお願いして、受け入れしていただいているというような事態も実際に生じております。このような状況というのは、お待ちいただいている他の疾患の患者さんや、あるいは当院の救急患者を受け入れていただいている近隣の病院の皆さんも長期間にわたってその状況が維持できるとは思っておりません。また、患者数の増加によれば、当院の、より高度な診療制限というのをせざるを得ないというような状況になってしまいます。

この感染症は、人との接触を断れば減らすことができるような病気です。長期にわたる対応で、県民の皆さんも大変お疲れで、この辛抱も限界に来ているというような状況はよくわかるんですけども、何とかこの1月我慢をしていただいて、県全体の患者数の発生というのを減らすことにご協力いただけたらと思います。私からは以上です。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

菅先生、ありがとうございました。この第4波は、特に変異株が愛媛県下9割以上を占めていると考えられており、とても感染力が強い、そして重症化もしやすいという特徴があり、県立中央病院は、必死に頑張っていたいただいているということがよくわかりました。

それでは、次に愛大病院の重症患者の状況について、愛媛大学医学部救急医学、佐藤格夫先生、お願いいたします。

(愛媛大学医学部救急医学・佐藤教授)

愛媛大学の救急医学佐藤格夫です。

第1波、第3波、第4波とできる限りの重症患者を我々のところで診るという形で頑張らせていただきました。第1波の時は、2人の人工呼吸器で、第3波の時は、約20名。この時は機能分化ということで、愛媛大学ではドクヘリの患者をなるべく大学へ搬送しないように県立中央病院にお願いして、重症な救急の患者を県立中央病院に、重症なコロナの患者は大学でということで診療を行ってきました。第3波の時に、愛媛大学の中では、いろいろな診療科にお願いして、7割の手術制限を行いました。そのところでがんの手術を遅らせなければいけないということがありました。それ以外に、心血管、脳疾患、交通事故の患者さんなど、行くところに困る現象は、どうにかぎりぎり回避できてきたところで

第4波、59名、あの日ですね。あの発表の日にスイッチが変わりました。このままでは、愛媛大学だけでは無理ということで、県立病院の方に、診療制限とともに、救命センターの機能を少し落としてでも、コロナの患者を受け入れようという形で県全体で頑張らせていただいています。

ただし、今、集中治療の部屋は残りがそれほどありません。中等症まで診ている患者さん、昨日は夜中の1時半、本日は夜中の3時半、「今のこの酸素投与ではもちそうにない、転院をお願いしたい」と、そのような形でこの2日間で3人の患者さんが来ました。この患者さんたちは、基本的に1週間から10日前の発生です。発生者数の中から約1週間から10日後に、我々の重症患者の方に来るといいうしわ寄せがきます。このところの感染者数を見ると、本当に持ちこたえられるだろうか、持ちこたえられない、逼迫、崩壊、そういう言葉が脳裏に浮かびます。他の都道府県で起きている現象、特に大阪などで起きている現象というのは、愛媛県でも起こりうると、やはり考えざるを得ない、そこまで私自身は追い込まれています。

夜中に、「ちょっとこれもう酸素だけではもたない、転院をお願いしたい」といった時に「ベッドがないので、ちょっと無理です」。私自身、救急医ですので、助けられる命は助けたいです。命を見捨てることなく、どうか治療したいと思っています。ベッドがない、どうにもならないとなると、酸素投与、中等症で頑張っている病院が、その患者さんの治療をどうにかしなければいけない、私も辛いです。頑張って、たくさん、多くの患者さ

んを診ている医療スタッフ、中等症まで頑張っている、その病院の医療スタッフも辛い。何よりも、患者さんとその家族が、本当に辛い思いをします。何とか、この重症患者が行き場がなくなってしまうという現象はどうか避けたいと思っています。何はともあれ、感染者数を減らす、これしかありません。皆さんが、数字を30人、20人と見ている以上に、私はこの患者さんが1週間後、10日後に重症化してやってくると、40が続いた時はどうしたらいいだろうかと考えつつも、中等症まで診ている病院で、本当に受け入れられなかった時はそこで人工呼吸をとということも個別にお願いしたりと、そんなことも話しております。

何とか患者数を減らす、これに尽きると思っています。県民の皆さんが一人一人感染しない、感染させない、密を避ける行動を、是非お願いしたいと思います。見捨てる命が出ないようにと、みんなが辛い思いをすることのないように、是非、県民の皆さんには、密を避けて、感染者数を減らすと、そういうところに、是非、お願いしたいと思います。以上です。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

佐藤先生、ありがとうございました。愛大病院は重症患者を診るという役割があるわけですが、かなり逼迫しているという状況をお話いただきました。それからまた、県民の皆さんへの強いメッセージもいただいたと思います。

私からは、県内の患者さんの流れと県民の皆さんへのメッセージをお伝えしたいと思います。

コロナの陽性で無症状の方は、自宅療養されている方がおられます。そして、無症状ないし軽症の方は、宿泊療養施設で管理されているわけです。そして、中等症の方が、松山赤十字病院と県立中央病院、その他、東予、南予の病院にも管理いただいています。それから、松山医療圏でも診ていただいている施設もあります。この第4波に入り、コロナ陽性の方を管理する病院がじわっと増えてきているわけです。そして重症患者が愛大病院と県中病院で管理しています。

しかしながら、この第4波はですね、先ほども申しましたし、先生方からお話がありましたが、急激に悪化するという特徴があります。ですから、自宅療養されている方、あるいは、宿泊施設におられる方から、一気に急速に重症化され、中等症の病院、あるいは重症を診る県立中央病院、そして我々の愛大病院の方に運ばれて来られるわけです。そうしますと、私どもの施設の役割としては、もちろん重症を診るわけですが、重症患者さんを治療し、回転よく重症のベッドを空けないといけません。ですから、必死に治療するのですが、ほとんどが人工呼吸器の管理になります。幸いに人工呼吸器から離脱できたら、速やかに、元の病院に戻っていただく、あるいは、他の施設にご移動いただく、そのような連携を行っているわけです。

しかしながら、患者さんが多くなってくると、当然のことながら、回転が追いつかない

わけです。そして、先ほど来、松山赤十字病院と県立中央病院の院長には、それぞれの病院の状況をお知らせいただきましたが、このようなコロナ患者を管理しながら、一般の救急医療を行わなければならないのです。コロナの患者さんを診て、救急医療も診なければならない状況です。これはとても大変な状況です。

現場の医療者は医師だけではございません。看護師も他の医療者も必死に対応しています。コロナの患者さんには、一人の患者さんに対して、よりたくさんの方が必要になるわけですから、とてもマンパワーを要するわけです。このような状況の下、県下では、病院と病院の連携、そして、医師会を中心に診療所の先生方にもご尽力いただいて、診療所と病院の連携がしっかりなされながら、なおかつ、行政には、コロナを診ていただける病床や宿泊療養施設を増やすために調整をいただき、そして保健所の皆さんには、朝から晩まで自宅療養をされている方をフォローしていただいているわけです。このように、医療者、行政が力を合わせて、コロナ対策を行っているわけです。

この未曾有の感染症、とにかく死亡者をなくさなければなりません。死亡者をなくすためには、感染者が増えてもらっては困るわけです。ですので、私からも重ねてお願いになりますが、県民の皆さんの一人一人のですね、うつらない、うつさない、この感染予防、これを徹底していただくということが、今後 1 カ月、特に大切になってくるように思います。このことを切にお願いして、私からのメッセージとさせていただきます。以上です。

それでは、最後に、県民へのメッセージという内容で、愛媛県医師会長の村上博先生にお願いします。

(愛媛県医師会・村上会長)

はい、村上です。私から、医師の立場で、県民の皆様に 5 つのメッセージをお届けしたいと思います。

まず 1 つ目。患者さんが複数いらっしやって、人工呼吸器があと 1 台しかない、それをどちらに着けるのか。そういった、苦しい選択、大切な命を、そこへさらさしてはいけないというふうに思います。そのためにも、「がまんのか月」にしましょう。まじめえひめの県民の皆さんが、本当にまじめなのかどうかを試されていると思います。カラオケ、会食、この際、昼間も夜も我慢した方がいいと思います。我慢してください。

2 番目。第 1 波、2 波、3 波、4 波。それから、緊急事態宣言が 2 回行われました。同じことを繰り返していると思います。そして、だんだん悪くなっている。感染を十分に抑制することこそが、最善の経済対策になるというふうに私たちは考えます。

3 番目。考えていることは、経済対策なんかだけではありません。私たちは、お一人お一人の命を救い、元気で社会に返してあげたい、決してギブアップしない、その一心で診療に邁進をしたいと約束をします。

4 番目。これまでは防戦一方でしたが、ワクチンを得て、これからは攻めの医療に転じていこうと思いますし、私たち開業医も懸命にワクチン接種で貢献をいたしたいと思っています。

ます。

5 番目。愛媛県医師会は、これまでと同様に、今後も、愛媛県庁と緊密に連携をして新型コロナウイルス感染症に対応して参ります。よろしくお願ひします。

私からの皆様へのメッセージは、以上であります。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

村上会長、ありがとうございます。それでは司会者にバトンタッチします。

(司会)

それでは、質疑応答に入りますが、ご質問のある方は挙手をお願いします。マイクをお持ちします。

(読売新聞)

読売新聞です。第 4 波では、重症患者が非常に多いような印象を我々も持っているんですけど、重症患者になると人工呼吸器であるとか、ECMO を装着したりすることになると思うんですけども、そうすると、中等症患者と比べてですね、医療従事者がかなり多く必要になると聞いているんですけども、実際の数字としてどれくらい人的資源が増えることになるんでしょうか。

(愛媛大学医学部救急医学・佐藤教授)

第 3 波の時に、ECMO というものを回す症例が出てきました。そこでは、常に、やはり、ちゃんとその機械が回っているかどうか。人のパワーとして、人数としては、約 3 倍、それくらいの人力は必要になるかと思ひます。幸ひ、今、第四波では、その症例はありませんけれども、そういう症例が出ないことを祈るのみです。

(司会)

他、いかがでしょう。

(あいテレビ)

あいテレビです。今、県の方が、看護協会を通じて、看護師の募集というのもやっているんですけども、医療現場にいらして、先生、当然大変かと思うんですが、看護師とか、そのあたりの不足というのは、どの程度深刻なんでしょうか。

(愛媛県立中央病院・菅院長)

なかなか我々の病院も看護師不足って非常に深刻です。それで、現在、我々のような急性期、超急性期の病院という、救急患者さんとか手術患者を受け入れて、手術とか検査を

集中的に行うような病院というのは、今、通常の医療をしている時も、在院日数とあって、一つの病気を治療する患者さんが、病院にいる期間が非常に短くなっており、コロナ患者さんがまん延する前から、慢性的に看護師さんの負担が大きく、短期間で集中的に非常に業務量が増えるということもあって、潤沢に看護師さんを抱えている病院というのは、なかなか地方では少ないのではないかと思います。それで我々の病院でも、実際に今の病床数を十分維持する、十分な看護師さんたちがいるとは思えない状況の中で、このコロナの治療に突入しました。

それで、通常、病床のこと、先ほどの人的資源の投入のご質問にもちょっと関わるんですけども、通常の病棟であれば、そういうふうな急性期の病院でも、患者さん 7 人に対して看護師さん 1 人くらいであれば、通常、診療上問題がないという形だと思うんですけども、やはりコロナ患者さんの治療においては、その倍くらいの人的な資源を、普通の一般の中等症とかの患者さんに関しても、投入しないとイケません。ICU とか集中治療系というのは、通常、国の基準では、患者さん 2 人に対して看護師 1 人かもしれないですけど、さっき佐藤先生言われたように、患者さん 1 人に対して看護師の方が多いかという逆転現象が、しっかり集中治療系では起こります。だから通常の 1 病棟であるとか、通常の ICU を運用するより、遥かに多い看護師の投入を必要とします。それが我々の病院が、なんであんな大きな病院なのに、看護師さんもいっぱいおるのと思うような施設が、やっぱり診療機能を抑制して、皆さんにご迷惑をおかけしなくてはいけない原因ですね。やっぱり手がかかります。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

愛大病院の状況もお話しします。愛大病院も県立中央病院と同じように、ICU、集中治療室がもともと 2 つあります。その 1 つを完全にコロナ病棟の重症病床にしているわけです。そうしますと、これまでそこに病床当たりの看護師がいるわけですが、それだけでは足りないわけです。ですから、そこに他の病棟から看護師さんが支援に行くわけです。そうしますと、そのもともとの病棟が看護師さんが減ります。ですからそこはまた大変なことになるわけです。それが続いていきますと、手術件数も減らさなければならないとか、一般診療を減らさなくてはならないという状況が生じています。今、看護部の協力のもと、最初は 5 人、7 人、8 人、そして今後 12 人という形で、他病棟から看護師さんがそこに支援に入ってくれています。しかしながら、それが耐え切れなくなりますと、もう他の病棟を、例えば一部病床数を減らして、その看護師さんを投入するとか、そういうことも考えなければならないわけです。一方で、愛大病院は愛大病院で、特定機能病院として、診なければならぬ、手術しなければならぬ患者さんもおられるわけです。中央病院も日赤病院も同じですけども、特定機能病院として、その機能を発揮しなければならない。そういう中で、重症な人の手術をするわけですが、その後 ICU で管理しなければならないわけです。その ICU がこのコロナの患者さんで詰まっているわけですから、そこがとても大変

だということのご理解をいただきたいということです。

(司会)

他、どうでしょうか。

(NHK)

NHK です。杉山院長に、発言の中で詳しく説明していただきたいことをお伺いします。この第 4 波では、軽症や無症状から急に病状が悪くなるという方がいるというふうにお伺いしましたが、それと変異株の増加というのは、関係があると考えられるのかと、そのような病状の急変によって、医療の体制にどのような影響があるのかというのを、ちょっと詳しくお伺いできればと思います。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

先ほど、田内感染制御部長からお話がありましたが、実際に第 4 波、この変異株、今現在、愛媛県も 90%以上が変異株であるというふうには考えられています。実際にそういう症例が増えているのは事実だと思います。先ほどの田内先生の話でもありました。それから、全国他府県でも、変異株と重症化、それから感染力の強さというのは、指摘されているところがございます。当然のことながら、先ほどもちょっと申しましたが、そういう急速に進行する、悪化するということは、中等症、重症に進むわけです。現場でそういう患者さんが増えていくわけですから、日赤病院、県立中央病院のコロナ病棟が詰まっていく。そこから、重症化が出てきてまた愛大もいっぱいになる。それで、愛大病院で治療して、何とか人工呼吸器から外れて、戻りたい。だけど戻すところが今度いっぱいになってきますと、戻せない。そういうようなことになると、非常に逼迫する。さらに医師会長おっしゃったように、これがもう今ぎりぎりの状態ですので、これがもし続けば崩壊します。今は、そこに一歩足を踏み込みつつある状況なのかなというふうには考えている次第でございます。

(朝日新聞)

朝日新聞です。私、ざくっと二点ほど、お尋ね、まずは事実確認を、今の皆様方の発言の中で事実確認をしたいのですけれど、役割分担として、重症化の患者さんを担っておられるのが、愛大と県中さんということで、あの中等症に関しては、今のところは、現状は日赤さんの方で対応されているという理解でよろしいのでしょうか。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

日赤病院と県立中央病院です。県立中央病院が中等症と一部重症の方も診ていただいています。

(朝日新聞)

あと、医療崩壊というご発言もございましたけども、先生方皆さん、いろいろご発言をいただきましたが、現実味を帯びているということですね、このままで行くとというというのは、先ほど大阪にあと一週間くらいでなりかねないというようなことも、一方、挙がりましたけれど、あと残り時間としてはあと一週間というか、そういう感覚という、かなり緊迫しておられるという理解ということによろしいのでしょうか。

(愛媛大学医学部附属病院・杉山院長)

そういう理解で結構かと思えますし、佐藤先生、これについて一言。

(愛媛大学医学部救急医学・佐藤教授)

まずは、感染者数が減ることが大事であり、約 1 週間くらい前の数字が重症化してくる人は来ますので、このままのペースでいくと、そういう状況に陥ると、そういうふうを考えています。何とか回転をよくして、集中治療、重症患者の病床数を空けてというのが県立中央病院、愛媛大学の役割だと思っています。

(朝日新聞)

最後にもう 1 点だけ。村上会長さん、先ほど、経済との兼ね合いのご発言、メッセージも発信されましたけれども、ちょっと、さっき、私十分聞きとれなかったんですけど、感染の何が最大の経済対策になると。

(愛媛県医師会・村上会長)

もう一度、2 番目のメッセージを繰り返しますが、これまで第 1 波、第 2 波、第 3 波、第 4 波と来ました。それから緊急事態宣言も 2 回経験しました。その都度、状況は悪くなっているような気がします。いろいろな手が打たれたんだと思いますが、ここはやはり感染者数を十分に抑制することこそが、最善の経済対策になるのではないかなというふうに理解し始めました。そのように理解頂ければ幸いです。

ただ、私たちは経済対策だけ考えているわけではなくて、やはり目の前のお一人お一人の患者さんを元気にして、社会に返してあげること、これがやはり私たちのミッションですから、まずそれを第一に考えて。苦しい現場ですけれども、ギブアップしないで診療に邁進をしていきたいと約束をしたいと思っています。

(司会)

予定の時間を超えましたので、最後にあとお一人ということでいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上で本日の共同記者会見を終了したいと思います。ありがとうございます

た。